慰霊祭　生徒代表挨拶

八十年前、この空は、青く澄んだ空ではなかった。空は火を吐き、大地は叫び、人々の夢や笑顔は、鉄の嵐の中にかき消されていった。

ここ沖縄で、住民を巻き込んだ激しい地上戦が繰り広げられ、二十万人もの尊い命が、未来を奪われた。そこには軍人だけでなく、幼い子どもも、おじい、おばあも、そして私たちと同じ年頃の学生たちも含まれていた。

私たち那覇高校の前身、県立第二中学校では、生徒・職員あわせて 196 名もの命が失われました。学ぶことを夢見ていた彼らが、教科書ではなく銃を持ち、机ではなく塹壕に身を伏せて命を落とした。その事実を、私たちは決して過去のものとして片付けてはいけません。今、私たちはこうして制服を着て、友達と笑い合い、家族と食卓を囲み、夢を語ることができます。けれどそれは、八十年前の彼らが願っても叶わなかった日常です。

私たちは、その「当たり前」が「奇跡」であることを、今一度心に刻む必要があります。

これまで、平和学習や慰霊碑を訪れる機会を通して、私は少しずつ戦争の記憶に触れてきました。けれど、部活動や学業に追われる日々の中で、「平和」について真剣に向き合う時間は、次第に減っていたように思います。そんな私にとって、慰霊の日という一日は、立ち止まり、耳を澄まし、亡くなった方々の声なき声に心を傾ける、かけがえのない時間です。

慰霊の日がかつて、公休日から外されそうになったことがあると聞いたとき、私は強い不安を感じました。もちろん、休日でなければ祈れないというわけではありません。けれども、この日が「特別な日」として記憶され続けることこそが、平和を守るための第一歩だと私は思います。

「平和とは何か？」この問いに、簡単な答えはありません。でも私は、悩みながらでも考え続けること、それそのものが、平和を支える大切な力だと思っています。毎年、自分に問いかける。「平和って何だろう？」と。その積み重ねが、やがて大きな願いとなって、未来を変えていくと信じています。

戦後八十年という節目の年を迎えた今、戦争を語れる人は少なくなってきています。だからこそ、私たちが「次の語り手」となり、沖縄戦の記憶を受け継ぎ、未来へと語り継いでいく責任があります。それは、犠牲になった方々への誠実な応答であり、平和をつなぐ懸け橋です。

那覇高校に通う私たちは、戦争を知らない世代です。けれど、知らないからこそ、知ろうとする責任があります。見えないからこそ、想像する力が必要です。忘れてはならない記憶を、言葉にして、行動にして、未来へ手渡していく

それが、今を生きる私たちに託された役目だと信じています。

二中健児の塔に祀られている196名の方々へ。あなたたちが夢見た未来を、私たちは生きています。その重みを胸に、あなたたちの想いを、確かに受け継ぎます。
また、本日ご参列されているご遺族の皆様に、心より敬意を表します。深い悲しみを乗り越えながら、こうして命の記憶をつないでくださっていることに、感謝の気持ちでいっぱいです。私たちは、その想いをしっかりと受け取り、次の世代へと伝えていきます。
どうか、安らかにお眠りください。そして見ていてください。私たちが、争いのない明日をつくる姿を。平和を願うだけではなく、平和をつくり出していく、その一歩一歩を。
今ここに、誓います。私たちは語り継ぎます。歩み続けます。
平和を、決して手放さないと。

令和七年　六月二十三日　　那覇高校生徒会長　小山結琉